

健康文化

定年退職後に登ったアフリカ最高峰 －わがキリマンジャロ山登頂記－

北川 勝弘

はじめに

私は、名古屋大学を定年退職した3年前（2005年）の9月に、アフリカ最高峰、キリマンジャロ山（5,895m）に登った。登頂時の達成感はたとえようもないほど大きく、まさにわが人生で最高級の至福の時を味わった。

本稿では、私がキリマンジャロ山に憧れた契機、登山計画の概要、そして現地での“よれよれ登山”の様子の一端について、書き留めてみたい。

1. キリマンジャロ山への憧れ

アフリカの最高峰、キリマンジャロ山は、アフリカ東部の国、タンザニアの北端に位置し、ケニアとの国境のすぐ南側にある。私が初めてキリマンジャロ山を間近に眺めたのは、2000年3月のことで、ケニアのアンボセリ国立公園内のロッジからだった。同公園は、ケニアの首都ナイロビからは、小型飛行機で約1時間の距離である。大きな象たちが青空の下でゆったりと歩いている広々とした草原の上に、どっしりとしたキリマンジャロ山が聳え立っていた。

私は、定年退職の6年前（1999年）の4月に、名古屋大学内に新設された農学国際教育協力研究センターへ農学部から異動した。センターでは、アフリカ関係の人材支援プロジェクトのコーディネーション（企画立案・調整）の仕事が多かったので、私はJICA（国際協力事業団）に関連した用務のため、東アフリカのケニア、タンザニア両国を頻繁に訪れた。ナイロビからタンザニアの首都ダル・エス・サラームまでは、約2時間の空の旅で、その航路はキリマンジャロ山の東側を通る。どっしり聳えるキリマンジャロ山の山容は、いつ見ても見飽きなかった。飛行機の窓から写したキリマンジャロ山の、山頂に雪を頂いた大きな噴火口の写真を、私は定年退職時に農学部で行なった最終講義（2005年2月）で、現役時代に憧れた対象のひとつとして、最後に映した。

2. キリマンジャロ登山の“お誘い”

退職後のある日、私は名古屋市内で働く長女から、耳寄りの“お誘い”連絡を受けた。「今年の9月に、職場の山の会の人たちとキリマンジャロ山に出かけることになりそうだけど、お父さん、一緒に行く？」

私は後先も考えず、すぐに「行く！」と娘に答えた。6月はじめに名古屋で、娘の職場の山仲間による、キリマンジャロ山行の打合わせ会が開かれた。参加人数は、私を含めて8名（男性3名、女性5名）。長女を含む3名の女性が30歳前後の若手である他は、皆、50歳代で、私だけが60歳代だった。リーダーのK氏が、ケニア・ナイロビの日本人が経営する旅行会社との打ち合わせ状況、登山計画の概要、個人装備、登山に関する注意事項等について、詳細に報告してくれた。参加費用は、飛行機代や現地での移動、宿泊、食事、ガイドやポーターの雇い上げ等の全経費を含めて、総額40万円程度。出発前には必ず、国内で3,000m級の高山に一度は登り、空気密度の低い高所の状況に肺を慣らしておくこと、と念を押された。

3. キリマンジャロ登山計画の概要

キリマンジャロ登山計画の概要は、以下の通りであった。(1)日程は、2005年9月10日（土）に中部国際空港を出発、同月25日（日）に同空港へ帰着の、計2週間。アフリカの入出国地は、ケニアのナイロビ空港。(2)ケニア・ナイロビに到着後、ただちに中部ケニアへ移動し、高所順応のため、アフリカ第2の高峰、ケニア山（5,198m）のある地域で3泊4日のトレッキングを行なう。(3)ケニア山から下山後、陸路でタンザニアに入国する。(4)キリマンジャロ山登山計画：上り4.5日間（ケニアに一番近い北側のロンガイ・コース）、下り1.5日間（東側に伸びるマラング・コースでモシ市に至る）で、計6日間。健脚コースとリラックス・コースに分かれて登る。(5)登山に際し、現地のガイドとポーター（約20名）を雇いあげる。宿泊テント、食料品は現地側が準備する。(6)個人装備：旅行者自身が登山中に持ち運ぶ荷物は、1人当たり8kgまでとなるようにまとめ、それを超える荷物は、ポーターが運ぶ。

話し合いの結果、私ともう一人の男性S氏の2人は、リラックス・コースを取ることにした。

4. ケニア山への足慣らしトレッキング

9月10日に日本を出発し、9月11日の早朝にケニアの首都ナイロビに到着した私たちは、ただちに、旅行社が手配してくれたワゴン車に乗り込み、ケニア中部の町ナロモルに移動した。そして、その日のうちに、アフリカ第2の高峰、ケニア山（5,198m）の西側から同山の中腹に向かうナロモル・ルートを辿る、高所順応のためのトレ

ッキングを開始した。初日：オールドモーゼス小屋（標高3,100 m）、2日目：シンプトンズ小屋（標高4,238 m）、3日目：マッキンダーズキャンプ場（標高4,300 m）と、順調に歩きまわった。

5. キリマンジャロ山への道

ケニア山トレッキングを終えた私たちは、ナイロビで1泊後、アンボセリ国立公園での1泊も経て、9月17日に陸路でタンザニアへ入国した。タンザニアの国境の村ロンガイにあるロンガイ・ゲートは、ケニアから最も近いキリマンジャロ山への北側登山口である。

キリマンジャロ登山の第1日目（9月17日）は、8名全員が一隊となり、キメンゲリア川沿いのロンガイ・ルートを辿って、標高2,600 mのセキバ・キャンプまで上がった。キリマンジャロ山北面の森林帯は、標高が2,350 mから2,700 mの間に分布し、鬱蒼とした広葉樹林帯が広がっていた。2日目の午後から、健脚コース組とリラックス・コース組は別行動となり、その翌々日、スクール・ハットと呼ばれる小屋（4,650 m）で再び合流した。

9月21日、いよいよキリマンジャロ登山の第5日目を迎えた。一同は、途中でご来光を拝むべく、頭にヘッドランプを付けて、午前1時半にスクール・ハット小屋を出発。健脚組は、リラックス組と同時に歩き出したが、じきにリラックス組の2人を後にして、ずんずん先に進んでいった。

私には、アシスタント・ガイドのM氏がついてくれた。私はこの日、出発直後から極度に体調が悪かった。空気密度の薄いことがまざまざと実感される。M氏が10歩ジグザグ道の先を進んでは、静かに私を振り返って私が追いつくのを待っていてくれた。私の方は、立ち止まったまま、上を向き、下を向きして何度も呼吸を整えてから、やおら歩き出し、M氏が待っている地点まで、ゆっくりゆっくり歩を進める。こんな調子の“超のろのろ登山”を繰り返した。

噴火口を取り巻く外輪山の南東端にジグザグの登山路が取り付く地点は、ギルマンズ峰（標高5,685 m）と呼ばれる。当初の計画案では、ここでご来光を拝むことになっていたが、そこに至る1時間前の6時半頃、東の地平線から橙色に輝く、明るい太陽が上がってきた。キリマンジャロ山の最高地点ウフル峰（5,895 m）は、外輪山上でギルマンズ峰から西方に2 kmの距離にある。外輪山まで辿りつけば、あとは比較的たやすい平坦路を進めばよいだろう、と私は期待していたのだが、呼吸の困難さはひどくなり、私のよれよれ歩きは容易には立ち直らなかった。

ある曲がり角に立つ大きな岩の手前まで辿りついたとき、M氏が私のあまり



写真1. 上空から見たキリマンジャロ山
(左上部の外輪山の右端が最高地点のウフル峰)

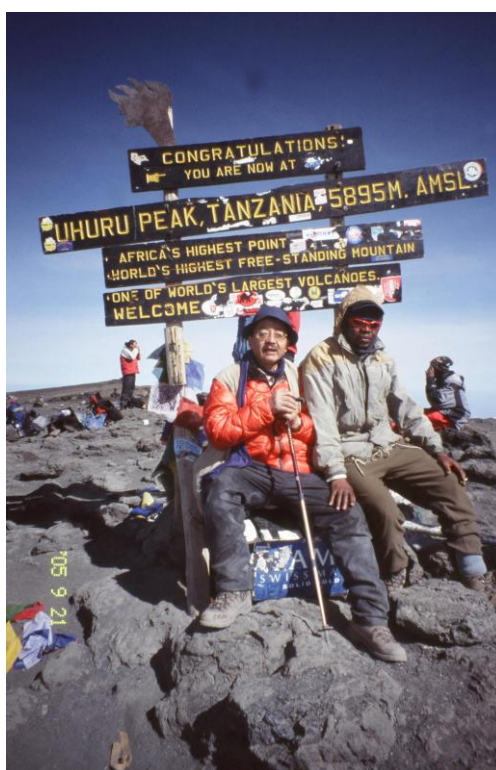


写真2. キリマンジャロ山（ウフル峰）山頂での記念写真
(著者（左）とアシスタント・ガイド)

にひどいよれよれ歩きぶりを見るに見かねて、私の右肩の下に自分の左肩を差し込み、抱え上げてくれようとした。まるで病人扱いである。私は、「ちょっと待って。水を飲みたいから…」と頼み、すぐ脇の道端に腰を下ろして、背中に担いでいたザックから水筒を取り出そうとした。

その時、「あらっ、お父さん！」と、思いもかけぬ娘の声がした。私がしゃがみこもうとした時には、巨岩に隠れていて道の先が見えなかったが、ちょうど次の瞬間、ウフル峰の登頂を果たした娘たち、健脚組の3人が、チーフ・ガイドらと5名で、巨岩の立つ曲がり角を曲がり、私たち2人の前に姿を現したのだ。道の上で出遭った私たちは、互いになにかやかに何気ない会話のやり取りをして、別方向に別れた。それにしても、危機一髪だった。巨岩のお蔭で、M氏に抱き抱えられようとした瞬間を、娘に見られずに済んだ。天、我に味方す！

6. キリマンジャロ山に登頂！

それからさらに30分ほどのろのろ歩きを繰り返した後、午前9時半頃に、私は遂にウフル峰に辿りついた。標高5,895mのアフリカ最高峰、キリマンジャロ山の山頂に、63歳にして立つことが出来たのである。

キリマンジャロ山への登頂を振り返ってみれば、よれよれになりながらも頂上を目指すことをあきらめず、遅々とした歩みではあっても辛くも歩き続けたことが、「アフリカ最高峰登頂」の達成につながった、と言える。

山頂から南東に位置するモシ市へ通ずる下山路を辿りながら、私は今回の登頂について、ただひたすら牛歩の歩みを進めてきたことが、遂にはこの喜びにつながったのだ、という思いを深く噛み締めていた。それは、あたかも自分の人生の歩みを振り返って見た時に抱く思いと、重なるところが大きいと感じられた。自分について、自分のこれまでの愚直な生き様、行動様式を愛でることが出来る喜びを、私は登頂の喜びに加えて、存分に味わっていたのである。

おわりに

私は中年を過ぎて以降、日常的にトレーニングを行なうことも少なく、体力の衰え様は、自他共に認めるひどきだった。そんな私でも、とにかく「キリマンジャロ山に登りたい」という一心だけで、その願いを実現できた。私の山行体験は、同年輩の同好の諸氏にとって、ひとつの検討資料となるだろう。

(元名古屋大学農学国際教育協力研究センター・教授)